

フィロソフィーブック

地域で最期まで、その人らしく。

理念

「地域の人たちの想いに寄り添い、
その人らしく暮らせるように、
全力でお手伝いいたします」

株式会社花利

看護小規模多機能型居宅介護セレッソ

目次

- 第1章 私たちの存在意義
- 第2章 その人らしさを知ること
- 第3章 プロフェッショナルとしての規律
- 第4章 ご家族と共に歩む
- 第5章 最期の時をその人らしく
- 第6章 経由地として、次のステージへのバトンパス
- 第7章 地域の中に生きる
- 第8章 現場で、判断するとき
- 第9章 この仕事を誇りに
- 結び セルフチェック

第1章：私たちの存在意義

01 なぜ私たちはここにいるのか

▶ 私たちは「介護をする場所」ではなく、「その人がその人として生き続けられる場所」をつくる。

「施設に入れば安心」「病院に行けば安全」——その言葉に、大切な何かが抜け落ちていることがあります。朝、いつもの窓から光が差し込む部屋で目を覚ますこと。馴染みの道を散歩すること。家族と同じ食卓を囲むこと。そんな「あたりまえの日常」を、最期まで守りたい方がこの地域にはいます。私たちは、その願いに応えるためにここにあります。

02 理念にある「全力でお手伝い」の意味

▶ 全力とは、諦めずに考え続けること。

忙しく動き続けることでも、全ての要望に応えることでもありません。「この方は、本当は何を望んでいるのだろう」——答えがすぐ出なくていい。迷いながらでもいい。その方のことを思い続け、仲間と知恵を出し合い、一步步近づく。その姿勢こそが、私たちの「全力」です。

03 かんたきだからできること——3つの機能が一つになる理由

▶ 通い・訪問・泊まりが一つのチームで。だから「どんな状況でも、知っている人が支えてくれる」安心が生まれる。

この3つが一つの事業所・一つのチームで提供されることに、大きな意味があります。体調が悪い日には訪問し、家族が疲れた夜には泊まりで受け入れる。どんな形でも、関わる顔ぶれは変わりません。それは「便利なサービスの組み合わせ」ではなく、利用者様にとっての信頼であり、生きる力です。

04 「医療があるから、ここで暮らせる」

▶ 「医療が必要だから施設へ」ではなく、「医療があるから、ここで暮らせる」。これが私たちの社会への約束。

かんたきには看護師が常駐し、看護と介護が日常の中で隣り合っています。医療と生活が切れ目なく繋がることで、「施設か在宅か」という二択を迫られてきた方に、第三の道を示すことができます。医療ニーズがあっても、住み慣れた地域で最期まで暮らせる可能性を広げる——それが、私たちかんたきの使命です。

第2章：その人らしさを知ること

05 「その人らしさ」を定義する

▶ らしさは、バイタルデータの中にはない。毎日の関わりの積み重ねの中にある。

毎朝欠かさず飲んでいたお茶の銘柄。家族にも見せない、ふとした口癖。大切に育てている庭の花——その方が「その方である」ことは、小さなこだわりの集積の中にあります。「らしさ」は初日には見えません。昨日より一つ、その方のことを知れた日は、確かに良い仕事をした日です。

06 顔なじみであることの力

▶ 「普通」を知っているから、「いつもと違う」に気づける。それが命を守る。

通いで毎週顔を合わせ、訪問で自宅の空気を知り、泊まりで夜の不安を共にする。その積み重ねの中で、利用者様の「普通」を知ることができます。いつもより食欲がない。表情が少し曇っている——数値には現れない変化を、毎日そばにいる私たちだけが最初に気づけます。顔なじみとは「仲良し」ではなく、その方の生活を歴史ごと知っている存在です。

07 看護と介護の境界線を消す

▶ 気づきを一人で抱え込まない。「なんか違うな」をバトンとして繋ぐことが、私たちの連携の本質。

職種の間は、利用者様には関係ありません。その方の前にいるのは「自分のことを知っている人」です。私たちの専門性とは資格の名称ではなく「情報の密度」にあります。言葉にならない「違和感」や「気づき」を自分一人で抱え込まず、職種を超えてチームに届けてください。

08 多職種チームで一人を支える

▶ 一人では見えないものが、チームには見える。

看護師、介護士、ケアマネジャー、厨房スタッフ、事務員——関わる全員が一人の利用者様を支えるチームの一員です。「自分の仕事はここまで」という壁を作らないこと。気になることがあれば職種に関係なく声に出す。その一言が、チームの情報を豊かにし、ケアの精度を高めます。

第3章：プロフェッショナルとしての規律

09 運営の規律は「守り」の要

▶ 早さや効率よりも「丁寧さ」と「安全」を。常に思考を止めず、情報の共有だけは迅速に。

かんたきの難しさは、目の前の一人と深く向き合うことと、利用者様全員の安全を守ることの両立にあります。急いでいる時こそ、一度深呼吸をしてください。私たちの仕事において、丁寧さを欠いた早さは、重大な事故へと繋がります。「これでいいか」と自分に問いかけ、思考を止めないこと。ただし、現場で起きた異変や情報の共有だけは、一刻も早くチームへ届けてください。それが、全員を守るための「守りの要」となります。

10 「安全」と「尊厳」の優先順位

▶ 禁ずるのではなく、一緒に考える。私たちは「尊厳の側に立つ勇気」を持つ。

安全のために「自由」や「喜び」を奪うことは、私たちが目指す姿ではありません。リスクをゼロにしようとするとき、その方の「生きる意欲」も奪ってしまうことがあるからです。「どうすれば安全に歩く喜びを支えられるか」——その問いを、チームで一緒に考え続けてください。

11 「柔軟性」の本当の意味

▶ 柔軟であることと、流されることは違う。判断の根拠は常に「この方の命と暮らしに何が大切か」。「今断ること」は、「より必要な誰かを守ること」。

ご家族のご要望に応えることは大切です。しかし、それが積み重なることで、本来最も支援を必要としている方へのケアが疎かになってはいけません。私たちの「柔軟性」とは、今何が最も必要かを見極め、判断する力のことです。今この瞬間も緊急の助けを待っている方のために、チームの余力を守ることが私たちの責任です。「今の私たちには、守るべき優先順位があります」——その言葉を誇りを持って伝えてください。

12 包括料金は「安心」への対価

▶ 「何度でも使えるサービス」ではなく、「24時間365日、いざというときに必ず繋がっている」という究極の安心への対価。

深夜の急変、家族が不安で眠れない夜——「どうしよう」と思ったとき、電話一本で繋がれる存在であり続けるために、私たちは日々の体制を整えています。「普通の日々」を丁寧に積み重ねることが、いざというときの「全力」に繋がっています。

第4章：ご家族と共に歩む

13 在宅介護を支えるということ

▶ 私たちは利用者様だけでなく、その方を支えるご家族の暮らしも、一緒に守っている。

仕事と介護の両立、夜中の急変への不安、「施設に入れたほうがいいのか」という罪悪感——誰にも言えない重さを抱えて歯を食いしばっているご家族が、この地域にはいます。ご家族が穏やかでいられるとき、利用者様の表情も和らぎます。「最近、少し疲れていませんか」——その一言が、大きな支えになることがあります。

14 「声なき不安」を見逃さない

▶ 「大丈夫です」の奥にある本音を受け取る。こちらから気をかけ、こちらから聞く。

ご家族が遠慮するのは「迷惑をかけたくない」という思いやりからです。その遠慮が積み重なったとき、突然限界を迎えることがあります。「何かあればいつでも」という言葉だけでは足りません。ご家族の「声なき不安」に気づいたら、一人で抱え込まずチームに届けてください。

15 拾うべき声と、断るべき声

▶ 判断基準はひとつ。「そのご要望は、利用者様の暮らしと命のために必要なことか」。

「夜中に不安で眠れない」——これは拾うべき声です。一方、包括料金を「何でも頼めるサービス」と誤解されているご要望が積み重なるとき、私たちは立ち止まらなければなりません。断ることは冷たさではありません。「より必要な誰かを守るための、誠実な決断」です。毅然と、しかし温かく伝えてください。

16 毅然さは、信頼の土台

▶ 「温かく、しかし揺るがない」——それがご家族と長く信頼関係を築く姿勢。

何でも受け入れることが、本当の意味での信頼関係を生むわけではありません。境界線のない関係はスタッフを疲弊させ、最終的に利用者様にしわ寄せがいきます。「お応えできません」と伝えるその言葉の裏には、「責任を持って守ります」という約束があります。

17 ご家族の揺らぎに寄り添う

▶ 共に揺れながら、そばにいる。それが私たちの答え。

「このまま在宅でいいのか」——看取りが近づくとき、ご家族の心は揺れ動きます。その揺らぎは深い愛の証です。私たちはその迷いを否定せず、簡単に答えを出すこともしません。「あのとき、一緒に考えてくれた人がいた」という記憶の中に温かく存在し続けること——それが私たちの仕事です。

第5章：最期の時をその人らしく

18 死を、特別にしない

▶ 昨日の続きとして、穏やかな日常の中で幕を閉じる。最期まで「患者」ではなく「住人」として。

病院でも施設でもない、私たちの看取りは「日常の延長」です。いつもの部屋で、なじみの顔に囲まれて——その方が長年暮らしてきた日常の中に、最期の瞬間がある。その方の人生を、最後のページまでその人らしく彩ること。それは、私たちにしかできない仕事です。

19 看取りを恐れなくていい

▶ 怖いと感じるのは、その方の命を真剣に受け止めている証。

看取りに「正解」はありません。そばにすること。手を握ること。いつもと同じ声で話しかけること——それだけで十分なことがあります。私たちは看取りのプロである前に「その人を知っている人間」です。怖いと感じたなら、隠さずチームに話してください。その気持ちを共有することが、次への力になります。

20 「最期がここでよかった」と言える場所に

▶ 今日のケアが、すでに看取りの一部。

「ここで看てもらえてよかった」——その言葉は突然生まれません。毎日の「おはようございます」の積み重ね、小さなこだわりを守り続けた日々、すべてが繋がって最期の言葉になります。今日その方と過ごした時間が、いつかその方の最期を「その人らしいもの」にします。

21 看取った後のあなたを、大切に

▶ 看取りの重さを一人で抱え込まない。チームで受け止め、チームで支え合う。

「もっとできることがあったのではないかな」——そうした問いは、愛情と責任感から生まれる自然な感情です。看取りの後は、チームで振り返る時間を持ちます。それは反省会ではなく「あの方の最期をみんなで受け止める時間」です。悲しいときは悲しいと言える場所が、ここに 있습니다。

第6章：経由地として、次のステージへのバトンパス

22 目的地は一つではない

▶ 病院から自宅へ、自宅から施設へ。人生の歩みを進める中での「大切な経由地」としての役割。

かんたきは、最期までここで過ごす方のためだけの場所ではありません。人生の岐路において、次の目的地へ向かうための準備を整える場所でもあります。私たちはここを単なる「待機場所」とは考えません。次の場所へ向かう前に、心身の状態を整え、ご家族の不安を和らげ、「その人らしさ」を再構築するための重要な充電期間であると定義します。

23 「卒業」という名の成功

▶ より適した環境へ笑顔でお送りすること。それもまた、地域を支える私たちのプロフェッショナルな仕事。

利用者が施設やより専門的な病院へ移ることは、私たちのケアが足りなかったものではありません。その方の状態を見極め、「今が、次へ進むベストなタイミングです」と自信を持ってご家族に提案し、笑顔でお送りすること。私たちが関わった時間は人生のほんの一部かもしれませんが、「ここに寄ってよかった、おかげで次も自分らしく過ごせそうだ」と思っていたけるような、質の高いバトンパスが利用者様の幸福に繋がります。

24 卒業の見極め —— それは「愛ある決断」

▶ 「いつまでも抱え込むこと」が正解ではない。利用者様の幸福を問い続ける誠実さを持つ。

「今のこの方にとって、本当にここが最良の場所か？」を常に問い直してください。私たちは、以下の3つのシグナルを大切にします。

1. **安全の限界：** かんたきの体制では、安全よりもリスクが上回ってしまったとき。
2. **生活の質の逆転：** ここでの暮らしが、ご本人にとって「馴染み」から「不自由」に変わっていないか。
3. **家族の限界：** ご家族の笑顔を守るために、プロの手（施設入所）に委ねるべきとき。「まだ早い」ではなく「今が最良」のタイミングで繋ぐ。その先読みの視点こそが、私たちが持つべき専門性です。

第7章：地域の中に生きる

25 私たちは、地域という生態系の一部である

▶ 私たちがいることで、「施設しかない」と思っていた方が地域に少しでも長く留まれる。

地域包括ケアシステムの中で、私たちかんたきは重要な位置を担っています。通い・訪問・泊まりを一体で提供し、看護と介護を融合させ、医療ニーズの高い方の在宅生活を支えられる事業所は、地域の中でそう多くはありません。私たちは地域の中で、なくてはならない存在です。

26 顔の見える連携が、命を救う

▶ 日々の丁寧な仕事と誠実な連絡が、地域の信頼ネットワークをつくる。

他機関のスタッフと言葉を交わすとき、それは単なる情報伝達ではありません。電話一本かけやすい関係、「あの事業所なら任せられる」という信頼——それは、丁寧な仕事の積み重ねによって生まれます。連携が途切れたとき、小さなほころびが大きな危機に繋がる可能性があります。

27 地域に「知られる」ことの意味

▶ 地域に知られることは営業ではない。助けを必要としている人に選択肢を届ける活動。

「かんたきって何？」——まだそう思われている方がこの地域にはいます。知られていないサービスは、必要な人に届きません。「あの事業所のスタッフ、感じがよかった」というたった一言が、いつか誰かの命を救う入口になることがあります。あなたの一つひとつの行動が、地域における私たちの「顔」です。

28 地域に支えられ、地域を支える

▶ 支え、支えられる関係の中に、私たちはいる。

地域の方たちとの交流、病院など他機関のスタッフからの信用——そうした関係の積み重ねが、私たちの仕事を支えています。日々の挨拶、丁寧な言葉遣い、誠実な対応——特別な取り組みだけが地域との信頼をつくるわけではありません。「あの事業所があってよかった」と思われる存在であり続けることが、地域への貢献です。

第8章：現場で、判断するとき

29 かんたきには「一人の現場」がある

▶ 一人の現場に立つとき、あなたは「チームの代表」としてそこにいる。

自宅への訪問、送迎の車の中、夜間の泊まり対応等——その場にいるのはあなただけです。しかし一人でも、あなたは一人ではありません。チームで積み上げてきた情報が、申し送りが、先輩の経験が——すべてがあなたの中に宿っています。

30 「何か」が起きたとき

▶ まず落ち着く。次に確認する。そして迷わず連絡する。

いつもより顔色が悪い、呼びかけに反応が薄い——そのとき、焦りは判断を鈍らせます。意識・呼吸・外傷を確認し、迷わず連絡してください。「たいしたことではないかもしれない」という思いが対応を遅らせます。一人の現場では、自分の判断を過信しないことがプロとしての姿勢です。

また、機材や備品の不調や破損も、利用者様の安全を脅かすものとなり得ます。何かがおかしいと感じた時は、迷わず連絡してください。

31 送迎中のアクシデントに備える

▶ 送迎は「移動の時間」ではなく「ケアの時間」。異変を感じたら、まず安全な場所に停車。

移動時の転倒、車内での体調急変、嘔吐——様々なことが起こり得ます。出発前にその日の状態を確認し、車内で異変を感じたら走りながら対応しないでください。停車→確認→連絡の順番を体に覚えさせておいてください。「口数が少なかった」などの小さな変化も、必ずチームに伝えてください。

32 夜の静寂の中で

▶ 「迷ったら、即、相談する」。「起こしてしまった」は、正しい判断。

夜間は特に孤独を感じやすい場面です。「こんな時間に連絡していいのか」と思わなくていい。連絡を受ける側は、その役割を担うことを前提にしています。夜間を感じた違和感や迷いを翌朝チームに届けてください。夜のあなたの判断を、翌朝チーム全員で支えます。

33 迷ったとき、あなたを支える判断軸

▶ 「今、この方の命と安全は守られているか」——この問いへの答えに迷うなら、それがすでに連絡すべきサイン。

「連絡するかどうか迷っている時間」は、連絡に使うべき時間です。迷いそのものが、チームを動かすべき理由になります。一人で抱え込まないという判断を、いつも選び続けてください。

34 一人の現場の経験を、チームの財産に

▶ あなたが一人の現場で感じたことは、チームを育てる力を持っている。

うまく対応できた経験はノウハウに、迷った経験は次の人への道標に、怖かった経験は体制を見直すきっかけになります。「こんなこともできなかったのか」と思われる恐れはありません。現場の声こそが、最も大切な情報です。

35 もしも失敗してしまったら

▶ 隠すことは最大の失敗。「個人の責任」ではなく「チームの課題」として共有する。

どれほど気をつけていても、失敗やミスが起きることはあります。大切なのは、その後の行動です。起きてしまったことを素直に報告し、隠さないこと。失敗を一人で抱え込むことは、利用者様をさらなる危険にさらすだけでなく、あなた自身を追い詰めることになります。私たちは、失敗した個人を責めることはしません。「なぜ起きたのか、次はどう防ぐか」をチーム全員で考える。その誠実な姿勢が、より強いチームと信頼を築きます。

第9章：この仕事を誇りに

36 あなたがここにいる理由

▶ あなたがここにいることが、誰かの日常を守っている。

医療的なケアが必要な方、看取りが近い方、複雑な家族関係の中にいる方——そうした方々の「その人らしい暮らし」を支えるために、あなたの力が必要です。忙しい日も、うまくいかない日も——あなたの存在が、誰かのかけがえのない支えになっています。

37 成長とは、その人をより深く知ること

▶ この仕事に、成長の終わりはない。だからこそ、深められる仕事。

昨日より一つ、その方の「らしさ」を知れた。先週より少し、ご家族の不安を受け取れた——そうした積み重ねが、この仕事における本当の成長です。数値では測れません。でも確かにあなたの中に宿り、利用者様の暮らしに反映されます。

38 仲間を大切に——チームが元気であるために

▶ 「助けて」と言える関係をチームで育てる。

疲れ果てたスタッフが温かいケアを届けることはできません。「最近、元気がなさそう」——そう感じたら声をかけてください。解決策がなくていい。「気にかけている」という気持ちが伝わるだけで十分なことがあります。あなたが誰かを支えた分、誰かがあなたを支えます。

39 「いい仕事をした」と思える日のために

▶ 今日の仕事が、いつかの「あの瞬間」に繋がっている。

「いい仕事をした」と思える日は、特別なことをした日ではないことが多い。いつもより少し丁寧に話を聞いた日。疲れていても笑顔で関わられた日——そういう日の積み重ねの先に、利用者様の笑顔や「ありがとう」があります。

40 私たちは、地域の「生き方」を守っている

▶ あなたは、地域の「生き方の文化」を作る仕事をしている。

この地域で私たちが丁寧に仕事を続けることで、「在宅で生きる」という選択肢が当たり前になっていきます。一人ひとりの利用者様への関わりが、この地域の未来を変えていく。大げさではありません。それが、かんたきという仕事の本質です。

結びに：セルフチェック

一日の終わりに、明日の自分への問いかけとして。採点ではありません。

● その人らしさについて

- ・ 今日、利用者様の「その人らしい瞬間」を一つでも見つけられましたか？
- ・ 「いつもと違う」に気づけましたか？顔なじみとして昨日より深く知れましたか？

● チームと連携について

- ・ 気づいたこと・感じたことをチームに届けられましたか？
- ・ 職種の壁を超えて、バトンを繋げましたか？仲間の様子に目を向けられましたか？

● ご家族について

- ・ ご家族の「声なき不安」を見過ごしていませんか？
- ・ 温かく誠実に、しかし毅然と、ご家族と向き合えましたか？

● プロとしての判断について

- ・ 「尊厳の側に立つ勇気」を持って判断できましたか？
- ・ 利用者様の「未来」を想像したうえで、利用者様とご家族の「今」を見ることができましたか？

● 一人の現場について

- ・ 迷ったとき、抱え込まずに連絡できましたか？
- ・ 訪問・送迎・夜間の経験をチームに届けられましたか？

● 自分自身について

- ・ 「いい仕事をした」と思える瞬間が、一つでもありましたか？
- ・ 明日も、この仕事を誇りに、ここに来られそうですか？

このフィロソフィーブックを最後まで読んでくれてありがとうございます。

書かれていることをすぐ全て実践できなくていい。

セルフチェック全てに「はい」と答えられる日は、そう多くありません。答えが出なかった問いは、明日への宿題。一人で抱えず、仲間と話してみてください。

迷う日も、くじけそうな日も、このフィロソフィーブックを開いてください。あなたがここにいることを、私たちは心から大切に思っています。

地域で最期まで、その人らしく——明日も、一緒に。